



Ritsumeikan University
College of Letters

教 学 の 手 引 き

2005

哲 学 専 攻

文 学 部

Table of Contents

哲学専攻

■ 哲学専攻 教学紹介

① 教学理念・目的	3
② 1・2回生小集団教育科目（研究入門、基礎講読）	3
③ 3・4回生小集団教育科目（3・4回生講読演習）	4
④ 講読科目	4
⑤ 講義科目	4
⑥ 人文科学総合講座	5
⑦ テーマリサーチ型ゼミナール	6
⑧ 研究入門	6
⑨ 卒業論文	11

■ 履修方法とユニットプログラム、履修モデル

① 科目一覧	22
② 履修方法	23
③ 受講登録上の注意	24
④ ユニットプログラム	25
⑤ 履修モデル	28

■ 学修を進めるにあたって

① 文献資料室と共同研究室	31
② クラスロッカーの使用方法について	31
③ セミナーハウスの正課用利用の手引き	32
④ 学生印刷室の利用について	33
⑤ 自主ゼミ援助制度について	34
⑥ 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて	34
⑦ 清心館「学生談話室」の利用について	35
⑧ 立命館大学人文学会	35
⑨ 文学部事務室について	36



哲学専攻 教学紹介

1 教学理念・目標

哲学は2600年の歴史を有する最古の学問です。2600年以上にわたる各時代の最高の知性による思索の重層的な積み重ねが哲学の世界を形成しています。したがってその学問内容は、深度、量ともに圧倒的であり、哲学が皆さんの知的情熱を裏切ることとは決してありません。存在の問題、価値の問題、美の問題、神の問題、人生の問題、その他およそ人間として問わねばならない問題のすべてが哲学という学問の対象であり、内容です。各時代を代表する偉大な哲学者たちの思索に親しむことによって、皆さんは恐らく世界を知り、人生の深みを見ることでありましょう。

本学の哲学専攻は西洋哲学の諸思想を中心にしてカリキュラム構成がなされています。M・ハイデッガーの表現を借りれば、「2500年の西洋形而上学の思索」が専攻カリキュラムのベースになっているわけです。存在論、認識論、倫理学、美学など、西洋の伝統的な哲学思想がカリキュラムの基礎です。しかし哲学専攻では、科目履修の系統性をより明確化するため、また専攻教学のアクチュアリティーを高め、現代社会が哲学に課している諸課題により的確に対応するために、専攻教学を2004年度入学生から「哲学・現代思想コース」と「倫理学・応用倫理コース」の2コースに分離します。1回生をコースに分かれる前の準備期間とし、2回生からそれぞれのコースに分かれて、系統的な履修をしていただきます。しかしいずれのコースに属するにしても、もう一方のコースの科目も自由に履修できますので、系統性を維持しつつも、多様な科目を履修することによって自らの学問をより豊かなものにするよう心掛けてください。

4カ年の学習において常に念頭に置いていただきたいことは、本学の文学部では卒業論文が卒業必須であるということです。哲学専攻においても、4回生終了時、卒業論文を作成し、その口頭試問に合格せずしては、卒業することはできません。専攻教学は「演習科目」、「講読科目」、「講義科目」の三つの柱で構成されていますが、目標はただひとつ、卒業論文の作成です。「専攻科目一覧」、「履修モデル」、「講義概要」などを参照の上、4カ年の学習の最終目標である卒業論文の作成に向けて学習計画を立て、各回生・セメスターに配当された科目を系統的に履修して行ってください。また卒業には124(128)単位の所定単位を揃えることが必要です。計画的な履修が肝要とされるゆえんです。「履修要項」を参照の上、年次計画的に単位を積み上げて行ってください。

以下、各回生に配当された専攻科目について、詳しく説明しておきます。

2 1・2回生小集団教育科目（研究入門、基礎講読）

まず、卒業にいたるまでの専門科目の必要単位数の内訳、配当回生を別表にて確認してください。1回生に配当されている専攻科目は「研究入門」と「哲学概論」および「倫理学概論」です。上でも述べましたが、2004年度入学生からは、それぞれのコースに分かれた系統履修は2回生以降となりますので、1回生はコースに分かれる以前の準備段階と考えてください。「研究入門」で指導を受けつつ、2回生以降どちらのコースを選択するかよく考えていただきたいと思います。

「研究入門」というまでもなく、哲学あるいは倫理学の初学者を哲学・倫理学の世界に導入することを目的として開設されている入門講座です。哲学専攻の新入生はまず最初にこの演習科目を履修しなければなりません。自らの意志によって哲学専攻に入学した以上、それぞれの学生が哲学への何らかの内的な動機を有する筈です。それはさまざまでありえますが、各学生のそういった内的な動機を客観的な学問的研究へと導くべく、教員が適切に指導いたします。主観的な内的関心を「哲学」あるいは「倫理学」という学問体系に裏打ちされた客観的な研究水準にまで引き上げることが当演習の目的です。1回生に配当された「哲学概論」ないし「倫理学概論」を同時に聴講しつつ、2回生以降のコース選択に備えてください。

研究入門の具体的な進め方などについては、後出の「8 研究入門」に譲ります。

2回生配当の演習科目は「哲学基礎講読」と「倫理学基礎講読」です(2003年度までの入学生は「哲学基礎講読」のみ)。2004年度入学生より2回生からコースに分かれます。哲学・現代思想コースに所属する学生は「哲学基礎講読」を、倫理学・応用倫理コースに所属する学生は「倫理学基礎講読」を取ってください。これ以降各コースの科目を中心に系統的に履修し、それぞれの学問において卒業論文の作成を目指すことになりますので、コース選択には十分に留意してください。

2回生の演習科目が「基礎講読」と呼ばれるゆえんは、文献を読解する能力を涵養することによって哲学研究の

基礎能力を培うことをこの演習は目的とするからです。哲学（倫理学も含めて）は基本的に文献を介した学問であり、また哲学書はおしなべて難解ですので、どのような哲学を研究テーマとして選ぶにせよ、その研究をしっかりと進めて行くためにはいかなる哲学書も読み解く能力が身につけている必要があります。この基礎能力の重要性に鑑み、2回生の演習を「基礎講読」として開設することにいたしました。教員の指導のもと、哲学・倫理学の基礎文献を地道に読み解く作業を通じて、この能力を確実に身につけてください。

2003年度までに入学したみなさんは、2回生からのコース選択はありませんが、履修の考え方は同じです。2回生から、自分の適正に合った履修計画を立てるようにしてください。

3 3・4回生小集団教育科目（3・4回生講読演習）

「哲学講読演習 ・ 」「倫理学講読演習 ・ 」（3・4回生講読演習）は卒業論文の作成を目指して研究指導がなされる演習です。哲学専攻では3・4回生合同演習の形態を採っています。したがって皆さんは3回生と4回生の2年間にわたり、基本的に同一演習で卒業論文の作成を目指して指導を受けることになります。もちろん関心が変わったり、卒論のテーマが変わったような場合には4回生時に他の演習に変わることも可能ですし、また専攻外演習のテーマ・リサーチゼミを取ることもできます。また必要によっては第二の演習として他専攻のゼミやインスティテュートのゼミなど「二つ目のゼミ」を取ることもできます。演習の目的はひとえに卒業論文の作成にありますので、自らの卒業論文のテーマをいらいらで、その作成に最も有効と思われる演習を履修してください。

哲学専攻では、哲学・現代思想コースの演習として「哲学講読演習 ・ 」が四つ、倫理学・応用倫理コースの演習として「倫理学講読演習 ・ 」が二つ、計六つの演習が開設される予定です（数と配置は年によって変わることがあります）。古代ギリシアや近世・近代など伝統的な哲学の分野、ドイツ系の現代哲学の分野、フランス系の現代哲学の分野などで卒業論文を作成しようとする場合は、哲学・現代思想コースの該当する演習に参加してください。伝統的な倫理学の分野、応用倫理学の分野で卒業論文を作成しようとする場合は、倫理学・応用倫理コースの当該の演習を取ってください。いずれにせよ「講義概要」などによってどの分野の演習であるかよく確認した上で、自分の関心に最も近い演習を履修し、卒業論文の作成に向けて指導を受けてください。なお、どの演習を選択するにせよ、4回生演習の履修が卒業論文提出の条件になっていますので、演習には必ず参加しなければなりません。

以上、演習科目の概要について述べましたが、演習科目は他の科目にもまして学生側からの主体的、積極的なかわりを必要とする科目であるということを指摘しておかねばなりません。演習の成果は卒業論文の作成・提出という形をとってはじめて明らかになるものであり、演習の成否は皆さんの積極的な取り組みと教員の指導が合致するところに成ると申せましょう。

4 講 読 科 目

講読科目は実際に哲学・倫理学の古典的文献を繙くことによって、直接哲学者の思想に触れるために設けられている科目です。哲学研究は哲学書の地道な読解に尽きるともいわれています。哲学・倫理学研究におけるこの科目の意味については多言を要しないと思います。

講読科目としては、主に和書をテキストとする「哲学・倫理学文献講読」と外国語文献をテキストとする「哲学・倫理学外書講読」があります。「外書講読」としては英語の文献をテキストとする「英書講読」、ドイツ語文献をテキストとする「独書講読」、フランス語文献をテキストとする「仏書講読」が開設されています。いずれの場合も哲学および倫理学の古典的な文献がテキストとして選ばれますので、これらの講読科目を取ることによって直接原典に親しむ習慣を身につけていただきたいと思います。取り上げられるテキストは年度によって異なりますので、その都度「講義概要」によって確認してください。

5 講 義 科 目

講義科目はいうまでもなく教員側からの講義を内容とする科目であり、概論、哲学史（倫理思想史）、特殊講義の

三種類があります。

まず概論科目ですが、「哲学概論 ・ 」と「倫理学概論 ・ 」が「研究入門」の補完科目として1回生に置かれています。いずれも初学者向けの概論科目です。研究入門を履修すると同時にこれらの概論科目を聴講し、哲学あるいは倫理学の原理、枠組み、方法、分野などに関する基本的知識を獲得し、哲学、倫理学への導入をより確かなものにしてください。そしてそのことによって2回生以降のコース選択に備えてください。

「哲学概論 ・ 」は2回生配当科目であり、「哲学概論 ・ 」に比べてより高度なレベルで哲学一般について論じるものです。「哲学概論」は、西田幾太郎のそれ以来、哲学の中心科目であり、哲学の根本問題、哲学の立場、方法、存在の問題、認識の問題などが講義されるのが伝統です。しかし最近では講義が総花的で無味乾燥なものになることを避けるために、担当者の専門領域を反映したより具体的な問題を加味した講義がなされる傾向にあります。いずれにせよ、講義内容については年度の当初に「講義概要」によって告知されますので、それで確認してください。

また倫理学関係では、「倫理学概論 ・ 」が2回生配当の科目として哲学・現代思想コースに置かれています。

哲学史関係としては2回生に「哲学史 ・ 」と「倫理思想史 ・ 」が置かれています。哲学・現代思想コースの学生は「哲学史 ・ 」に、倫理学・応用倫理コースの学生は「倫理思想史 ・ 」に軸足を置いて聴講するのがごく自然な履修ですが、しかし両思想史は決して別物ではなく、視点の異なる「哲学史」ともいえるべきものですので、事情が許す限り両方とも聴講することを専攻としては勧めます。なお、これらの哲学史関係の講義を一挙に履修することは不可能ですので、2回生以降も継続して各時代の哲学史を聴講し、2600年に及ぶ哲学の歴史を全体として把握する努力をしてください。

「哲学史 ・ 」では古代ギリシアから中世におよぶ哲学の歴史が講義され、「哲学史 ・ 」では近世・近代の哲学史、具体的にはデカルトからヘーゲルまでの哲学が講義されます。「哲学史 ・ 」の講義対象はヘーゲル以降、現代までです。また「倫理思想史 ・ 」では倫理的観点から見た哲学思想史が語られます。

また別の講義科目として2回生から3回生にわたって各種の特殊講義が開かれています。「哲学特殊講義 ・ 」、「哲学特殊講義 ・ 」（以上哲学・現代思想コース）「倫理学特殊講義 ・ 」、「倫理学特殊講義 ・ 」（以上倫理学・応用倫理コース）などです。これらの特殊講義は各教員の研究を踏まえて、哲学・倫理学のそれぞれの分野における最新の研究を講義という形で皆さんに提供しようとするものです。もちろん講義は哲学や倫理学の特殊な問題に関してなされることとなりますが、これらの講義を聴講することによっていわば皆さんは教員と共に「哲学・倫理学の最前線に立つ」ことになるわけで、そこでえられる情報は必ずや皆さんの卒業論文の作成に寄与するものとなることでしょう。哲学特殊講義は例年、ギリシア哲学、中世キリスト教哲学、ライプニッツやカントなどの近世・近代哲学、ドイツ観念論哲学、実存哲学、現象学、フランクフルト学派の社会哲学、英米の分析哲学、フランスの現代哲学などの分野から一定のローテーションで行なわれていますが、各年度によって講義内容が異なりますので、年度ごとに講義概要によってその内容を確認してください。また倫理学特殊講義は伝統的倫理学や生命倫理学、環境倫理学などといった応用倫理学の分野から毎年異なるメニューで講義されています。

以上の講義科目のほかに、哲学・現代思想コースに「ヨーロッパ現代思想 ・ 」が、倫理学・応用倫理コースに「応用倫理 ・ 」が置かれています。これらも大体特殊講義のカテゴリーに含めて考えていただいても結構です。これらは現代のアクチュアルな問題に対応するために特に置かれている科目ですので、現代思想あるいは応用倫理の分野で卒論を作成しようとする学生にとっては必修の科目といえることができます。

6 人文科学総合講座

以上に述べた講義科目のほかに学部共通の専門科目として多くの専門科目が開設されています。「人文科学総合講座」のもとに置かれている科目群がそれです。その内容、配当回生などについては、「履修要項」で確認してください。人文科学総合講座の中には言語学、芸術・芸術史、ラテン語、ギリシア語、キリスト教思想、東洋思想、西洋思想、宗教学概論、政治思想史、法哲学、人間学など、哲学に関係の深い科目が多く含まれています。これらは哲学専攻の準固有専門科目とでもいえるべきものですので、これらの科目群には専攻の固有専門科目に対するのと同じスタンスで臨んでください。そして哲学に関する教養をより広く、より豊かなものにするように努めていただきたいと思います。

7 テーマリサーチ型ゼミナール

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバル化を目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習的テーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。

3回生のゼミ選択の際には、卒業時（4回生）にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといった事を考え、ゼミを選択します。その際、自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。

テーマリサーチ型ゼミナールでどのようなテーマのゼミが開講されているのかはシラバスで確認をして頂きたいと思いますが、以下に2005年度、3回生ゼミのいくつかを記しますので是非参考にしてください。

2005年度3回生ゼミテーマ 例)

他者問題と文化理解、文化としての「移動」2、京都から発信する京都文化学、辞書をつくる、ECOTOURISMエコロジの旅2、

8 研究入門

(1) 哲学への導入 Introductio ad Philosophiam

「研究入門」は1回生に配当された演習科目のひとつで、これから哲学を学ぼうと志す初心学生を哲学の世界へと導き入れることを目的として開設されている入門講座です。哲学を専門として選択した以上、それぞれの学生が哲学への何らかの内的な動機を有するはずですが、内的な動機、それはまだある種の情熱でしかありませんが、そういった動機に学的な端緒をつけ、継続的な学問研究への定着を計ることが本演習の目標です。

以下、研究入門の内容、すすめ方などについて記しておきます。ただし、演習の運営方法は担当者によって異なります。ここに記すのはその一例です。

(2) 研究入門の内容、すすめ方、および年間スケジュール

哲学は2600年の歴史を有する最古の学問です。2600年以上にわたる各時代の最高の知性による思索の重層的な積み重ねが哲学の世界を形成しています。したがってその学問内容は、深度、量ともに圧倒的であり、哲学が皆さんの知的情熱を裏切ることは決してありません。むしろ問題はすべてのを一挙に習得することは何人にも不可能であるということです。そこで自ずから哲学の世界に入っていく道筋・手順ということが問題になってくるわけで、異なる志向性を有するそれぞれの学生に最も適合した手順を処方することが研究入門の最重要課題となります。

<面 接>

そこで、まず最初に、前期セメスターの2～3回の演習において、それぞれの学生の哲学への動機、志向性を主にヒヤリングを通じて確認する作業を行ないます。これはどのような哲学が、またどの哲学者の哲学思想が当該学生のニーズに最も答えうるか確認するためのものですので、皆さんは自らの内面に問いかけて、自分は一体何を求めているのか、一度しっかりと見据えておいてください。

<研究課題の提示>

次に教員サイドから主要な哲学者とその著作（後出）を提示し、どの哲学者ないしは哲学を自らの4ヵ年の研究対象にすべきか、学生諸君に考えてもらいます。哲学は常に哲学者の名とともに語られます。哲学一般などというものはありません。哲学を研究することは特定の哲学者の哲学を研究することです。そのような研究はきわめて限定されたものになりはしないかという懸念は杞憂です。特定の哲学を突き詰めることが普遍的な哲学に通じる唯一の道なのです。このことは結果として分かることですが、今は信じて自らが対象とした哲学者の追究に邁進してく

ださい。いつも申していることですが、歴史の洗礼を受けた各哲学者は知的世界に聳え立つ巨大な高峰です。それらの峰のどれかひとつでもきわめれば、すべての峰が展望できるようになります。

<講 義>

その間に、前期セメスターの数回の演習において、教員側から2600年の西洋哲学の世界を概説し、哲学のアウトラインを教示します。これは哲学の世界を漠然とでもイメージできるようにするためのもので、詳細は1回生担当の哲学概論・、倫理学概論・、2回生以上担当の哲学概論・、論理学概論・、同じく2回生以上担当の哲学史・などの講義科目に譲ります。これらの講義科目を併せ聴くことによって、人類は一体何を考えてきたのか、謙虚に考え、学び取ってください。

<研究課題の選定とレポートの作成>

そういった教示を行なった上で、各学生に研究対象を選んでもらい、自ら研究対象として取り上げた哲学者ないし哲学について、夏季休暇の課題として、レポートを課します。取り入れ、そして出すことの反復が哲学の思索にとってきわめて重要と考えますので、演習ではレポートの作成を特に重視しています。夏季休暇中、必ず一冊はまとまった古典的著作に取り組んでください。二ヵ月近くにおよぶ夏季休暇は古典的な哲学書に取り組むまたとない機会です。そしてそれについてレポートを書いてください。レポートの書き方については、後述します。

<研 究 発 表>

後期セメスターでは主に上記レポートに基づいて、学生に研究発表を課します。そしてその発表に教員側からコメントをつけると共に、それをクラス全員の討議に付します。発表の順番はあらかじめ定めておきますので、発表者は必ず発表の一週間前にレジュメを提出してください。レジュメの作成の仕方については、「(6) 研究発表およびレジュメ」の項を参照のこと。

<読書会、共同研究会、サブゼミについて>

同じ哲学者、また同系統の哲学を研究対象として選んだ学生間で読書会や研究会を組織して共同研究を行なうことを勧めます。哲学は難解な学問ですので、孤独な勉学のみでは息切れすることがあります。そのような時、同一テーマを共に追究する研究仲間の存在は励みになるものです。演習の下部組織としてサブゼミという考え方があります。今日では特にサブゼミの時間帯といったものは設けられていませんが、多くのサブ的なグループ研究があってはじめて演習は成果を上げることができます。多くの読書会が組織されることを期待します。研究会・読書会の組織については、後述するTAや先輩の指導を受けてください。

<年間のまとめと学生諸君への期待>

以上のような年間の作業を通じて、各学生がそれぞれの内に哲学研究の芽を抱懷し、やがてそれが発展して卒業時に卒業論文として結実することを研究入門は期待しています。学年末にはそれへの確かな証となるような「まとめのレポート」を提出して下さい。まとめのレポートは研究が2回生以降も着実な歩みをたどることを見込ませるようなものでなければなりません。そのために研究入門は以上に述べたさまざまな取り組みを行なうわけですが、しかしそれらの作業において最も重要なのはやはり各学生の哲学への積極的なアプローチです。哲学への情熱なくしてはどのような取り組みも成果を得ないものになってしまうでしょう。演習参加者の哲学への積極的なアプローチを心より期待します。

以上の各項において記したことを、以下に少し敷衍して述べておきます。

(3) 研究対象として考えられる哲学者および著作一覧

どのような哲学ないしは哲学者を研究対象とするかは各人の自由ですが、その候補になるとと思われる哲学者とその主要著作を下に挙げておきます。もちろんすでに考えが決まっている場合には、これら以外から選択することも自由です。自分で決められない場合は、教員との面談の中で決めることになります。

プラトン 『ソクラテスの弁明』『饗宴』『パイドン』『国家』他。

アリストテレス 『形而上学』『ニコマコス倫理学』『政治学』『詩学』他。

アウグスティヌス	『告白』『神の国』『三位一体論』他。
トマス・アクィナス	『存在と本質』『自然の原理』『神学大全』他。
デカルト	『方法序説』『哲学原理』『知性改善論』他。
スピノザ	『エティカ』他。
ライプニッツ	『单子論』『形而上学序説』『人間悟性新論』『弁神論』他。
ロック	『人間悟性論』『市民政府論』他。
バークリー	『人知原理論』他。
ヒューム	『人性論』他。
カント	『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』『プロレゴメナ』他。
フィヒテ	『全知識学の基礎』『ドイツ国民に告ぐ』他。
シェリング	『先験的観念論の体系』『わたしの哲学体系の叙述』『人間的自由の本質』他。
ヘーゲル	『精神現象学』『大論理学』『法哲学』『エンチクロペディ - 』他。
ショーペンハウエル	『意志と表象としての世界』
ニーチェ	『悲劇の誕生』『人間的、あまりに人間的』『反時代的考察』『ツァラトゥストラはかく語りき』『善悪の彼岸』『道徳の系譜学』『権力への意志』他。
キルケゴール	『死にいたる病』『反復』『あれか、これか』『哲学的断片』他。
フォイエルバッハ	『キリスト教の本質』他。
マルクス	『経済学・哲学手稿』『ドイツ・イデオロギー』『共産党宣言』『資本論』他。
ベルグソン	『物質と記憶』『創造的進化』『道徳と宗教の二源泉』他。
フッサール	『論理学研究』『イデーン』『デカルト的省察』『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』他。
ハイデッガー	『存在と時間』『形而上学とは何か』『形而上学入門』『ヒューマニズムについて』他。
サルトル	『実存主義とは何か』『存在と無』『自我の超越』『想像力の問題』『弁証法的理性批判』他。
メルロ・ポンティ	『行動の構造』『知覚の現象学』『意味と無意味』『シーニュ』『眼と精神』『見えるものと見えないもの』『世界の散文』他。
フーコー	『狂気の歴史』『監獄の誕生』『言葉と物』『知の考古学』『性の歴史』他。
デリダ	『声と現象』『エクリチュールと差異』『グラマトロジーについて』『他の岬』他。
ラカン	『エクリ』他。
レヴィナス	『時間と他者』『全体性と無限』『暴力と聖性』他。
ドゥルーズ	『アンチ・オイディプス』『千のプラトー』他。
リオタール	『ポストモダンの条件』『漂流の思想』他。
ラッセル	『数理哲学序説』『西洋哲学史』他。
ヴィトゲンシュタイン	『論理哲学論考』『哲学的探究』
ホワイトヘッド	『過程と実在』他。

(4) テキスト

研究入門は演習科目ですが、初心者用の演習科目というその性格上、適宜講義が挟まれます。またテキストを用いて演習がすすめられることもあります。そのために大抵の場合テキストが指定されていますので、講義概要等で確認の上、指定テキストを入手しておいてください。テキストは担当者によって異なります。例えば2000年度の研究入門の一方のクラスでは『西洋哲学史』(岡崎、日下部、榊原、服部、他著、昭和堂)が選定されておりました。2004年度はテキストを用いず、必要に応じて資料を配付していました。

(5) 評価およびレポート

評価は大抵の場合、年間2本のレポート(前期レポート、後期レポート)教室での1回ないし2回の発表、それに日常評点を加味して行なわれます。これらの中で評価に最も大きく影響するものはやはりレポートですので、まず最初にレポートの作成について述べておきます。

レポートは400字詰原稿用紙に換算して10枚程度を目安に作成してください。もちろんそれ以上書く必要がある場合は、それを越えても結構ですが、大幅に越える場合は担当教員にその旨を通告し、了承を得てください。手書原稿でもワープロ原稿でも結構ですが、ワープロ原稿の方が読みやすいのでありがたいですね。縦書き・横書きは任

意。書式については特に指定しません。自由に作成していただいて結構です。それよりも重要なのはやはり自分で考え、自分で書くということです。このことは当然のことですが、最近適当なテキストから写し取ったようなレポートが目につくので、あえて記しておきます。色々な書物を参考にすることはもちろん必要であり、結構なことですが、丸写しは剽窃になりますので、評価外となります。注意してください。

先にも述べましたが、夏期休暇後に提出されるレポートに特に注目しています。長い休暇の期間にどのような古典に取り組み、どのように思索したか、そのことが4ヶ年の哲学研究に決定的な意味を持つと考えるからです。蛮勇を奮って大哲学者の主著に取り組み、その格闘の軌跡を彷彿とさせるようなレポートを提出して下さい。もちろん後期のレポートは一年間の勉学を総括するようなものでなければなりません。

(6) 研究発表およびレジュメ

年間1度ないし2度の教室での研究発表を義務と考えてください。発表はひとり30分の枠で設定されます。発表20分、質疑応答10分です。発表の仕方は原則として自由ですが、通常哲学の学会では用意した原稿を読む形で発表しています。20分の枠で原稿を朗読する場合、20枚ないし30枚の原稿を用意する必要があります。発表はかなり大変な仕事になります。心して当たってください。発表の順番はあらかじめ決めておきますので、それに向けて準備してください。発表は原則として、前期レポートが出た後の後期セメスターの時間帯に設定したいと考えていますが、前期セメスターに設定する場合もあります。

発表には必ずレジュメを用意してください。レジュメは発表の一週間前に全員に配布しておくこと。その印刷については、「小集団クラス印刷申請書」(後述)を利用して行ってください。レジュメの書式については、それぞれに考えがあろうかとも思いますが、その一例を次に挙げておきます。

ニーチェの人と思想について

2005年×月0日
哲学太郎

- § なぜわたしはニーチェを研究するのか。
ニーチェ哲学の現代的意味
- § 哲学者ニーチェの生涯
なぜ彼は発狂したか。
- § ニーチェの思想
 - (1) ギリシア悲劇とニーチェの芸術論(『悲劇の誕生』から)
アポロンのものとディオニュソスのもの
 - (2) ショウペンハウエルとニーチェ(『反時代的考察』)
「生への意志」と「権力への意志」
 - (3) 一切価値の転換(『人間的、あまりに人間的』『偶像の黄昏』)
 - (4) 超人思想(『ツァラトストラはかく語りき』)
永劫回帰の思想をめぐって
 - (5) ヨーロッパのニヒリズム(『権力への意志』)
 - (6) アンチクリスト・ニーチェ(『反キリスト者』)
ディオニュソス対十字架にかけられた者
 - (7) ニーチェとドイツ音楽(『ワーグナーの場合』)
- § 回顧と展望 ― 今後の研究見通し ―

これはもちろん一例でしかありませんが、研究発表の要旨が明確に理解できるようなものを用意してください。

(7) レジューメ印刷について

発表原稿やレジューメを印刷する場合には「小集団クラス印刷申請書」の提出が必要です。同申請書に指導教員のサインをもらった上で文学部の事務室に提出し、学生証と引き替えに清心館 1 F 談話室横の印刷機の鍵を受け取り、談話室横の学生印刷室にて印刷を行なってください。

(8) 助手・TAについて

哲学専攻には 1 名の助手と複数のティーチング・アシスタント (TA) がいて、皆さんの研究・学習を援助してくれます。研究・学習上、懸念があったり、問題が生じた場合には、遠慮せずに彼らに相談してください。助手も TA も現役の院生です。したがって今現在哲学のそれぞれの分野を専門として研究している現役学生でもあるわけで、皆さんと研究を共にする先輩です。それぞれに得意分野があって、問題によっては答えられない場合もあります。どの TA はどの分野の研究者であるか、正確に把握した上で、相談に訪ねてください。なお、助手・TA の勤務時間は専攻の共同研究室 (共研) の前に張り出されています。

また上述のレポートやレジューメの作成に当たっても、TA の指導を受けてください。その他、研究対象としての哲学者の選定や参考文献の検索についても、TA はよきアドバイザーになってくれることでしょう。助手や TA に親しく接して、日常的に指導を受けることを勧めます。

(9) 哲学共同研究室 (共研)

清心館の 3 F に哲学の共同研究室があります。事実上、学生の自主管理になっていますので、やや乱雑な状態になっていますが、哲学専攻固有の施設ですので、大いに利用してください。上述の助手や TA も共研に詰めています。また共研ではさまざまな読書会や研究会が日常的にもたれており、それらに参加することは必ずや皆さんの研究に裨益するところあると考えます。積極的な参加を勧めます。

共研には哲学の基本文献とパソコン (2 台) がおかれています。これらを使用することは基本的に哲学専攻学生の誰にでも認められている権利です。ただし、使用については若干の決まりがあります。使用規則を遵守して活用してください。

(10) 図書館、文学部文献資料室

哲学は基本的に文献を介したかわりの中成り立っている学問です。哲学を勉強するということは書物・文献を相手に暮らすというに等しいところがあります。そういった意味からも図書館という施設は皆さんの学生生活にきわめて大きな意味を持つ存在といえることができます。早く図書館に慣れ、図書館を大いに利用してください。

なお、文献関係の施設としては、中央図書館とは別に文学部に「文献資料室」という施設が修学館の地下 1 F に設けられています。こちらは主に洋書を中心に収蔵している施設です。哲学の主要原典は主にここに収蔵されています。一度訪ねて、哲学の基本文献がどのようなものであるか、その眼で確かめてみてください。ただ、移動式の開架方式になっているので、一見して見渡しにくい面があります。助手か TA に案内してもらうのも一助です。とにかく一度訪ねて、原典を手にとってみてください。2600 年の彼方から西洋の知恵が語りかけてくるのが実感されます。

(11) 参考文献

参考文献は多岐にわたるので、その都度教室で紹介します。基本的なものは「[9](#) 卒業論文」に掲載していますので、それを参照してください。

(12) その他、注意事項

学習をすすめて行く上でのこまごましたことについては、教室でお話し申し上げますが、ただひとつ、授業をはじめに当たってどうしてもいっておかねばならないことがあります。それは出席についてです。演習は小集団科目であり、出席が義務づけられています。出席が 3 分の 2 に満たない学生は年間 2 本のレポートを提出しても評価外となりますので、注意してください。はじめてひとりで下宿生活する学生が大半です。自己管理に留意し、健全な学生生活に努めてください。健全な学生生活が継続的な勉学を可能にします。継続的な勉学があってはじめて研究も実を挙げ、立派な卒業論文の作成も可能になります。

気が早いようですが、皆さんの立派な卒業論文に接することを専攻教員一同、何よりも楽しみにしています。

皆さんの 4 カ年の勉学が実り多いものになることを心より祈っています。

9 卒業論文

卒業論文は4ヵ年の学修・研究の総決算であり、専攻教学の全体系が卒業論文というこの一点を目指して組み立てられているとあって過言ではありません。また演習担当者も卒業論文の作成を目指して皆さんを指導いたします。哲学研究の成果は論文の作成・提出という形をとってはじめて世に明らかになるものであり、この点は今も昔も変わらないわけです。1回生の研究入門、2回生の基礎講読、3・4回生の講読演習と積み重ねてきた研究成果を「卒業論文」という形で世に問う気概をもって、論文の作成に取り組んでいただきたいと思います。先にも述べましたが、本学の文学部では卒業論文が卒業必修になっています。卒業論文を提出し、試問に合格せずしては卒業することができません。卒業論文には心して当たってください。学年終了時、皆さんの立派な卒業論文に接することを専攻教員一同、何よりも楽しみにしております。

卒業論文の具体的な書き方、体裁、書式、枚数、提出日など、卒業論文の作成に当たっては数々の留意点がありますが、それらについて以下述べておきます。

哲学専攻「卒業論文」の体裁について

原稿用紙に手書きする場合	B 5 判400字詰原稿用紙または、B 4 判400字詰原稿用紙（二つ折り） 縦書の場合は横長に、横書の場合は縦長にする。
縦書・横書の指定	指定なし
枚数	30枚以上50枚以下
その他の注意	黒または青のペンを使用すること。
ワープロを使う場合	B 5 判白紙 縦書の場合は横長に、横書の場合は縦長にする。
縦書・横書の指定	指定なし
文字数に関する指定	1行あたりの文字数：指定なし 1頁あたりの行数：指定なし
枚数等に関する指定	400字原稿用紙に換算して30枚以上50枚以下 総字数を明記すること。
その他の注意	
表紙等に関する体裁	硬版（黒色） 表と裏に硬版を使い、綴じ紐で綴じること。
大きさ	B 5
綴じ辺	B 5 判用紙に縦書きする場合のみ短辺（右辺）綴じ その他の場合は長辺綴じ
題目シール	所定のものを貼付

卒業論文は、4年間の学習と研究の成果を集約するものです。このためその作成にあたっては、綿密な計画とねばり強い研究心をもって取りくまなければいけません。

卒業論文の指導については、「講読演習 II」でそれぞれのゼミ担当教員が行ないます。論文題目の提出期限が9月末～10月であるので、それまでに演習担当教員の指導を仰ぐほか、必要に応じては学内外の研究者に意見を求めることも大切です。

題目の選定は論文作成の出発点となるので、確たる問題意識をもって決めてください。しかし、いかに問題意識が旺盛でも、基本的な文献の修得がなければ良い論文はできません。このため論文作成にあたっては基本的な文献を早めに修得し、これを十分に用いることができるように努める必要があります。

論文作成のための大まかな時間的な計画を示せば、10月までには基本的な文献を整理し、論文全体の組み立てを構想する必要があります。

いざ論文作成に着手すれば、思わぬ難関に直面することもあるので、全体として余裕をもって進めることが望まれます。

論文の構成についてはいろいろな形が考えられますが、一般的に言えば、序論、本論、結論の三部分からなります。序論では自分の取りあつかう問題の所在を明らかにし、本論で問題内容の展開を行ない、結論では全体で論じたことを明確にします。具体的な叙述の形式は、学術雑誌に掲載されている論文を読まれれば参考になるでしょう。

論文の枚数は、400字詰用紙で30枚以上、50枚以下が規定です。これは厳守すべきです。なお、ワープロ原稿の場合、それに該当する字数内であればよいでしょう。ただし総字数を明記してください。その他、細かな点はゼミ担当教員の指導を仰げばよいですが、その書式について留意すべき事項をあげておくと、次の通りです。

1. 原稿用紙はB4版またはB5版の硬版黒色ファイルものを使用すること（縦書きであっても横書きであってもよいが、B4版の場合は二つ折にしてとじること）。ワープロ原稿の場合、必ずしも原稿用紙を用いる必要はないが、B5版の用紙を使用すること。そしてそれに市販のB5版用の硬版の表紙（黒色）を添付すること。
1. 章節のはじめの書き出しや改行のときは、一字下げて書くこと。
1. 引用文は必ず引用符を付け、出典（著者、書名、引用頁）を明記すること。注は本文最後にまとめても、脚注としても構わない。
1. 注とは別に参考文献を挙げる場合には、著者、書名、発行所、発行年を記して最後にまとめて列挙すること。
1. 提出論文にはページ付けし、目次を付すこと。
1. 本体は「です・ます調」ではなく、「である調」を用いること。

なお、他人の見解や表現を、引用によらずに、勝手に自分の文章に組みこんではならない。これは論文作成にあたっての常識であるので、くれぐれも注意していただきたい。

最後に、論文作成にあたっての参考文献をあげておくので参考にしてください（勿論、一部です）。

「卒業論文」の提出について

「2005年度卒業論文」の提出締切期限は、

12月20日(火)午後5時とします。＜時間厳守＞

提出の際は、学生証が必要です。

必ず本人が持参してください。事前許可なしで代理提出はできません。

締切時間は厳守してください。遅延提出は一切認められません。

卒業論文の提出の形式が整っていないと受理できないケースもありますので、万端に準備してください。

単なる体調不良や交通機関の延着・機器等の故障・勤務の都合等の理由での提出遅延は、認められません。余裕を持って提出できるように心がけてください。

予測不可能かつ緊急の事態などで、どうしても締め切り前の提出が困難になった場合、**自分で判断せず、必ず事前に文学部事務室に一報**してください。事前連絡・相談があったケースに関してのみ、本人申請書・証明書類を提出の上、教授会の審議を受けた上で提出の延期を許可する場合があります。（全てが許可されるとは限りません。）事前連絡と必要な書類手続の両方が満たされていることが大前提です。事前の連絡がない場合は、事後の対応が不可能になります。

「卒業論文」の提出前に、「**卒業論文題目届**」を文学部事務室に提出することが必要です。「卒業論文題目届」の提出締め切り期限は、

10月6日(木)午後5時とします。

論文審査の主査・副査の発表は、10月下旬から11月上旬とします。各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

口頭試問の日程は、1月下旬から2月中旬に行います。個人別の日時は、1月中旬頃に各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

卒業旅行の日程は、口頭試問を避けてください。

卒業論文の形式は、各専攻・プログラムにより異なりますが、以下の形式は共通ですので、必ず守

ってください。

卒業論文は、添付資料なども含め、必ず **2部** 提出してください。

表紙に論題、氏名、学生証番号などを記載してください。

2005年度卒業論文
「○○・・・・・・（論題）」
学生証番号、氏名

論題は、事務室に提出した「卒業論文題目届」と全く同一でなければなりません。卒業論文作成中に論題の変更が必要となれば、主査・副査の変更がないか必ず指導教員に確認した上で、事務室で論題変更の手続きを行ってください。テーマ自体が変わるなど、大きな変更は認められません。

主査・副査の名前を記した紙（シールになっています）を、おもて表紙の裏側に貼り付けてください（2部とも）。「主査・副査シール」は文学部事務室で配付しています。主査・副査は10月下旬から11月上旬に共同研究室内の掲示板に掲示されていますので、早めに確認してください。

体裁については各専攻の「教学の手引き」に従って作成してください。（専攻によっては体裁の変更指示もあるため、各専攻掲示を確認してください。）

体裁については、各専攻で点検します。したがって、窓口・提出会場で受け付けられた論文でも、専攻で体裁上の不備が発見された場合は、口頭試問の時点でF評価となることがありますので、注意してください。

2005年度後期 卒業論文に関する日程

日 程	内 容
10月6日(木)午後5時まで	「卒業論文題目届」事務室提出締め切り
10月下旬～11月上旬	主査・副査発表（共同研究室掲示板）
11月28日(月)～12月5日(月)	題目変更期間
12月13日(火)	卒業論文受付開始
12月20日(火)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
1月中旬頃	口頭試問日程発表（共同研究室掲示板）
1月下旬～2月中旬	口頭試問実施

5回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

日 程	内 容
4月28日(木)午後5時まで	「卒業論文題目届」事務室提出締め切り
7月1日(金)～7月8日(金)	題目変更期間
7月13日(水)	卒業論文受付開始
7月20日(水)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
7月下旬～8月	口頭試問はこの間に実施します。日程は7月下旬に各専攻・プログラムの共同研究室掲示板に掲示します。

テーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文（非卒業論文形式含む）を提出するには

テーマリサーチ型ゼミナール受講学生の皆さんは、従来のような卒業論文提出の形態（卒論形式）もあり得ますが、クラスによっては、そこで制作する卒業論文は従来の専攻のような論文形態によらず、共同で成果物（本の出版等）を仕上げてこれを卒業論文とすることができるという形態（非卒論形式）も認められています。提出期日・提出先・提出方法については、卒論形式か非卒論形式かによって取り扱いが異なります。必ずクラス内で担当教員に、いずれの形式なのかを確認してから作成してください。卒論形式・非卒論形式いずれの場合も「卒業論文・卒業制作テーマ届」（←卒論形式・非卒論形式共通）は全員提出してください。

「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り：10月6日(木)午後5時まで

テーマ届変更期間：11月28日(月)～12月5日(月)

体裁について

卒論形式で制作の場合	文書体裁	字数・書式・用紙の大きさなどはクラス担当者の指示に従うこと
	表紙等に関する体裁	題目、学生証番号、氏名を必ず記載すること
	その他注意	1. 学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類は該当しない。 2. 主査・副査の発表・口頭試問日程等は担当者の指示に従ってください 3. 提出締め切り等の詳細は「テーマリサーチ型ゼミナール・卒論形式で提出する方」を参照してください。
非卒論形式で制作の場合	文書・表紙体裁	体裁については全てクラス担当者の指示に従うこと
	その他注意	1. 制作物（成果物）の提出が不要の場合であっても卒業論文・卒業制作テーマ届を所定の期日までに文学部事務室へ提出してください。 2. 制作物（成果物）の提出が必要な場合、提出期日・提出先・提出方法などは担当教員の指示に従ってください。 3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮）」を実施することがあります。実施日については、担当教員の指示に従ってください。

テーマリサーチ型ゼミナール「卒論形式」で提出をされる方の提出について

提出に際する諸注意は基本的に前述の「卒業論文」の提出についてに従ってください。ただし、以下点が異なりますので留意してください。

TRSのばあい、「卒業論文題目届」ではなく、「卒業論文・卒業制作テーマ届」の提出が必要です。

論文審査の主査・副査の発表日程は授業内にて指示します。

口頭試問の日程は基本的に1月下旬～2月中旬に行う予定ですが、個人別の日時等は授業内にてお知らせしますので、クラス担当教員の指示に従ってください。文学部共同研究室掲示板に掲示することもあります。

日 程	内 容
10月6日(木)午後5時まで	「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り
10月下旬～11月上旬	主査・副査発表(担当教員による指示)
11月28日(月)～12月5日(月)	題目変更期間
12月13日(火)	卒業論文受付開始
12月20日(火)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
1月中旬頃	口頭試問日程発表(担当教員による指示)
1月下旬～2月中旬	口頭試問実施

5回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

日 程	内 容
4月28日(木)午後5時まで	「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り
7月1日(金)～7月8日(金)	題目変更期間
7月13日(水)	卒業論文受付開始
7月20日(水)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
7月下旬～8月	口頭試問はこの間に実施します。日程は各担当教員に確認してください。

§ 哲学専攻参考文献 §

哲学一般・哲学史

- ・『西洋古代哲学史』日下部吉信 昭和堂 1981年刊
- ・『哲学研究大系』(全7巻) 下村寅太郎・服部英次郎編 河出書房新社 1977～1979年刊
- ・『講座哲学』(全4巻) 山本信(ほか)編 東京大学出版会 1973年刊
- ・『岩波講座哲学』(全18巻) 務台理作(ほか)編 岩波書店 1967～1969年刊
- ・『新岩波講座哲学』(全16巻) 大森荘蔵(ほか)編 岩波書店 1985～1986年刊
- ・『岩波新・哲学講義』(全8巻 別巻1) 岩波書店 1997年
- ・『岩波哲学・思想事典』廣松渉(ほか)編 岩波書店 1998年刊
- ・『岩波講座現代思想』(全16巻) 岩波書店 1993～1995年刊
- ・『講座哲学大系』(全7巻) 田中美知太郎編 人文書院 1965～1968年刊
- ・『西洋哲学史』(全4巻) J. ヒルシュベルガー著 理想社 1967～1978年刊
- ・『シャトレ哲学史』(全8巻) F. シャトレ編 白水社 1975～1976年刊
- ・A History of Philosophy. (9 Volumes.) : F. Copleston, Image Book (New York). 1962～1977
- ・『西洋哲学史』岡崎、日下部、服部、榊原、他著 昭和堂 1994年刊
- ・『自然概念の哲学的変遷』池田善昭編 世界思想社 2003年刊

古代哲学 (印以外のものには巻末に文献案内あり。)

- ・『パルメニデス』K. ボルマン著、日下部吉信訳 法政大学出版局 1992年刊
- ・『ソクラテス以前の哲学』
- ・『ソクラテス』
- ・『プラトン』
- ・『アリストテレス』
- ・『ストア哲学』
- ・『エピクロス哲学』
- (いずれも) J. プラン著
クセジュ文庫 白水社
1959～1971年刊
- ・『ソクラテス以前哲学者断片集』(Ⅰ～Ⅴ, 別冊Ⅰ) 岩波書店 1996～1998年刊
- ・『初期ギリシア自然哲学者断片集』(Ⅰ・Ⅱ) ちくま学芸文庫 2000～2001年刊
- ・『後期ギリシア哲学者資料集』山本・戸塚訳編 岩波書店 1985年刊……
- ・『プラトン全集』(全15巻・別巻1) 岩波書店 1974～76年刊
- ・『プラトン』A. コイル著 みすず書房 1972年刊
- ・『プラトン』(全4巻) 田中美知太郎著 岩波書店 1979～1984年刊
- ・『アリストテレス全集』(17巻) 岩波書店 1968～73年刊
- ・『アリストテレス』G. E. R. ロイド著 みすず書房 1973年刊
- ・Aristotle. D. Ross, Methuen (London & New York) 1923
- ・『カテゴリー論史』A. トレンデレンブルグ著 日下部吉信 松籟社 1985年刊

中世哲学 (印以外のものには巻末に文献案内あり。)

- ・『中世思想原典集成』(全20巻) 平凡社 1992年～
- ・『キリスト教神秘主義著作集』(全17巻) 教文館 1989年～
- ・『中世哲学史』F. コプルストン著 創文社 1970年刊
- ・『中世哲学の精神』(上・下) E. ジルソン著 筑摩書房 1974年・1975年刊……
- ・『後期中世の哲学』J. マレンボン著 勁草書房 1989年刊
- ・『アウグスティヌスの根本問題—中世哲学研究第一—』山田 晶著 創文社 1977年刊……
- ・『トマス・アキナスの エッセ 研究—中世哲学研究第二—』山田 晶著 創文社 1978年刊
- ・『在りて在る者—中世哲学研究第三—』山田 晶著 創文社 1979年刊
- ・『トマス・アキナスの レス 研究—中世哲学研究第四—』山田 晶著 創文社 1986年刊
- ・『アウグスティヌスとトマス・アキナス』E. ジルソン & Ph. ベーナー著 みすず書房 1981年刊……

- ・『アウグスティヌスからアンセルムスへ』泉 治典著 創文社 1980年刊
- ・『トマス・アクィナス哲学の研究』稲垣良典著 創文社 1970年刊.....
- ・『アベラール』柏木英彦著 創文社 1985年刊

近代哲学

(頁数は、文献表の載っているページを示す。なお 印以外のものには巻末に文献案内あり。)

【1】概 説

- ・『西洋近世哲学史稿』(上・下) 九鬼周造全集 第6・7巻 九鬼周造著 岩波書店 1981年刊.....

【2】クザヌス

- ・『クザヌス研究序説』日本クザヌス学会 国文社 1986年刊.....p. 323 ~ 327

【3】イギリス経験論

- ・『ジョン・ロック研究』田中正司(ほか)編 未来社 1980年刊.....巻末 p. 10 ~ 26
- ・『パークリ研究』名越 悦著 刀江書院 1967年刊.....p. 541
- ・『ディヴィッド・ヒューム研究』大槻春彦(ほか)編 御茶の水書房 1987年刊.....巻末 p. 45 ~ 61

【4】大陸合理論

- ・『デカルト哲学とその発展』桂 寿一著 東京大学出版会 1969年刊.....
- ・『デカルトとその時代』野田又夫著 筑摩書房 1975年刊.....
- ・『スピノザ哲学研究』工藤喜作著 東海大学出版会 1972年刊.....p. 491 ~ 500
- ・『スピノザの哲学』桂 寿一著 東海大学出版会 1956年刊.....
- ・『ライプニッツの普遍計画』E. J. エイトン著 工作舎 1990年刊.....p. 513 ~ 515
- ・『ライプニッツ哲学論攷』池田善昭著 南窓社 1983年刊
- ・『「モナロドジー」を読む』池田善昭著 世界思想社 1994年刊

【5】カント

- ・『イマヌエル・カント』O. ヘッフェ著 法政大学出版局 1991年.....巻末 p. 17 ~ 28に欧米の文献
- ・『カント読本』浜田義文編 法政大学出版局 1989年刊.....p. 387 ~ 389
- ・『現代カント研究Ⅰ——超越論哲学とは何か——』カント研究会編 理想社 1989年刊.....巻末 p. 7 ~ 32に欧米の研究文献
- ・『現代カント研究Ⅱ——批判的形而上学とは何か——』カント研究会編 理想社 1990年.....巻末 p. 14 ~ 56に日本語文献
- ・『現代カント研究Ⅲ——実践哲学とその射程——』カント研究会編 晃洋書房 1992年.....巻末 p. 23 ~ 80に日本語文献
- ・『現代カント研究Ⅳ——自然哲学とその射程——』カント研究会編 晃洋書房 1993年.....巻末 p. 22 ~ 41に日本語・外国語文献
- ・『現代カント研究Ⅴ——社会哲学の領野——』カント研究会編 晃洋書房 1994年.....巻末 p. 22 ~ 30に日本語・外国語文献

【6】ドイツ哲学

- ・『フィヒテ知識学の研究』隈元忠敬著 協同出版 1979年刊.....p. 422
- ・『フィヒテ「全知識学の基礎」の研究』隈元忠敬著 溪水社 1986年刊.....p. 328 ~ 330
- ・『シェリング哲学の研究』西川富雄著 法律文化社 1960年刊.....(補論に研究・文献紹介)
- ・『続シェリング哲学の研究』西川富雄著 法律文化社 1994年刊
- ・『シェリング実践哲学研究』河野 真著 以文社 1973年刊.....巻末 p. 19
- ・『シェリング読本』西川富雄監修 法政大学出版局 1994年刊
- ・『理想—641号：ヘーゲル特集』理想社
1989年(冬号)刊.....p. 145 ~ 192に山口誠一(ほか)編による文献案内
- ・『理想—645号：ヘーゲル特集』理想社
1990年(冬号)刊.....p. 1 ~ 8に山口誠一(ほか)編による文献案内
- ・『ヘーゲル読本』加藤尚武編 法政大学出版局 1987年刊
- ・『続ヘーゲル読本』P. ヘンリッヒ他 法政大学出版局 1997年

- ・『講座ドイツ観念論』(全6巻) 弘文堂 1990年
第3巻 巻末 p. 1~27に日本語のフィヒテ研究文献
第4巻 巻末 p. 1~19に日本語のシェリング研究文献
- ・『叢書ドイツ観念論との対話』(全6巻) ミネルヴァ書房

現代哲学

【1】新カント派

- ・『理想——643号：新カント派特集』理想社 1989年(夏号)刊

【2】実存主義・生の哲学

- ・『理想——555号：キルケゴール特集』理想社 1979年8月刊
- ・『現代理想——4巻12号：ニーチェ特集』1976年11月刊
- ・『ベルグソン研究』フランス哲学研究会 勁草書房 1961年刊
- ・『ベルクソン』檜垣立哉著 勁草書房 2000年刊

【3】現象学

- ・『講座現象学』(全4巻) 木田 元(ほか)編 弘文堂 1980年刊
- ・『現象学』木田 元著 岩波新書 1970年刊
- ・『現象学とは何か』新田義弘著 講談社学術文庫 1992年刊
- ・『フッサールの思想』ベルネ/ケルン/マールバッハ著 哲書房 1994年刊
- ・『フッサール現象学』立松弘孝編 勁草書房 1986年刊
- ・『現代思想——総特集フッサール』青土社 1978年10月刊
- ・『現象学の根本問題』新田義弘・小川 侃編 晃洋書房 1980年刊
- ・『意識の自然』谷 徹著 勁草書房 1998年刊
- ・『これが現象学だ』谷 徹著 講談社現代新書 2002年刊
- ・『声と現象』デリダ著 理想社 1970年刊
- ・『ハイデガー(岩波現代選書)』G. スタイナー著 岩波書店 1980年刊
- ・『ハイデガー「存在と時間」入門』渡辺二郎編 有斐閣選書 1980年刊
- ・『ハイデガー』木田 元著 岩波書店 20世紀思想家文庫 1983年刊
- ・『ハイデガーの思想』木田 元著 岩波新書 1993年刊
- ・『ハイデガーを学ぶ人のために』大橋良介編 世界思想社 1994年刊
- ・『いま、サルトル』石崎晴己他著 思潮社 1991年刊
- ・『メルロ＝ポンティの思想』木田 元著 岩波書店 1984年刊
- ・『メルロ＝ポンティ』鷲田清一著 講談社 1997年刊
- ・『自然の現象学』加國尚志著 晃洋書房 2002年刊

【4】構造主義

- ・『レヴィ・ストロース』渡辺公三著 講談社

【5】ヘーゲル左派

- ・『ヘーゲル左派——思想・運動・歴史』石塚正英編 法政大学出版局 1992年刊
- ・『理想——653号：特集ヘーゲル左派と現代』理想社 1994年刊
- ・『ヘーゲル左派論叢』(全4巻) 良知力・廣松渉編 御茶ノ水書房 1986年～
- ・『マルクス カテゴリー事典』マルクスカテゴリー事典編集委員会編 青木書店 1998年刊
- ・『歴史における自然の論理』服部健二著 新泉社 1990年刊

【6】論理実証主義

- ・Logical Positivism. A. J. Ayer(ed.) Macmillan Publishing Co., Inc., 1959 ”
- ・『ラッセル思想辞典』牧野 力編 早稲田大学出版部 1985年刊
- ・『ヴィトゲンシュタイン小事典』山本信・黒崎宏編 大修館書店 1987年刊
- ・『ヴィトゲンシュタイン読本』飯田 隆編 法政大学出版局 1995年刊
- ・『ヴィトゲンシュタイン』飯田 隆著 講談社
- ・Critical assessments, vol. 5 : A Wittgenstein bibliography V. A. & S. G. Shanker(ed.) Ludwig Wittgenstein,

Croom Helm, 1986

【7】言語哲学・論理学

- ・『現代哲学基本論文集Ⅰ・Ⅱ』勁草書房 1986・87年刊
- ・『言語哲学大全』飯田 隆著 勁草書房 1989年刊
- ・『現代の論理的意味論——フレーゲからクリプキまで——』野本和幸著 岩波書店 1988年刊
- ・『別冊——数理科学——ファジイ理論への道——』サイエンス社 1988年10月刊
- ・Philosophy of logics, Susan Haack, Cambridge University Press, 1978

【8】科学哲学

- ・『現代哲学選書13——科学の哲学——』竹尾編 北樹出版 1979年刊
- ・『新版現代哲学選書4——言葉の哲学——』坂本百大編 北樹出版 1983年刊
- ・『科学論』H. ロムバツハ著 創文社 1980年刊
- ・『科学と哲学——論理・物理・心・言語——』内井惣七・小林道夫著 昭和堂 1988年刊
- ・『クーン』野家啓一著 講談社
- ・『システム科学の哲学』池田善昭 世界思想社 1991年

【9】フランス現代思想

- ・『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて——』H. ドレイファス・Pラビノウ著 筑摩書房 1996年刊
- ・『デリダ』高橋哲哉著 講談社 1998年刊
- ・『レヴィナス』港道 隆著 講談社 1997年刊
- ・『レヴィナス』合田正人著 ちくま学芸文庫 2000年刊
- ・『レヴィナス・何のために生きるのか』小泉義之著 NHK出版 2003年

【10】批判理論

- ・『フランクフルト学派再考』徳永 恂編 1988年刊
- ・『岩波講座 現代思想 8 批判理論』岩波書店 1994年刊
- ・『アドルノ』細見和之著 講談社 1996年刊
- ・『ベンヤミン』三島憲一著 講談社 1998年刊
- ・『ルカーチ』初見基著 講談社 1998年刊
- ・『ホルクハイマーの批判的理論』森田数実著 恒星社厚生閣 2000年刊

倫理学

【1】概説・倫理思想史

- ・『倫理学とは何か』有福、訓覇編 勁草書房 1989年（新版）刊
- ・『エチカとは何か』有福孝岳編 ナカニシヤ出版 1999年刊
- ・『倫理学』W. K. フランケナ 培風館 1975年（改訂版）館
- ・『西洋倫理思想の形成』（Ⅰ）小熊、川島、深谷編 晃洋書房 1985年刊
- ・『西洋倫理思想の形成』（Ⅱ）小熊、川島、深谷編 晃洋書房 1986年刊
- ・『西洋倫理思想の展開』寺崎、塩出編 学術図書出版 1987年刊
- ・『善の本質と諸相』深谷、寺崎編 昭和堂 1983年刊
- ・『正義論の諸相』寺崎、塚崎、塩出編 法律文化社 1989年刊
- ・『自由の法則・利害の倫理』内井惣七著 ミネルヴァ書房 1988年刊
- ・『現代倫理学の冒険』川本隆史著 創文社 1995年刊
- ・『現代倫理の課題』関西倫理学会編 晃洋書房 1990年刊
- ・『モラル・アポリア』佐藤、溝口編 ナカニシヤ出版 1998年刊
- ・『道徳の理由』安彦、大庭、溝口編 昭和堂 1992年刊
- ・『なぜ悪いことをしてはいけないのか』大鹿・安彦・永井編 ナカニシヤ出版 2000年刊
- ・『規範の基礎』日本倫理学会編 慶應通信 1990年刊

【2】生命倫理・環境倫理

- ・『生命倫理の現在』塚崎、加茂編 世界思想社 1989年刊

- ・『生命倫理学を学ぶ人のために』加藤、加茂編 世界思想社 1998年刊
- ・『生命学への招待』森岡正博著 勁草書房 1988年刊
- ・『バイオエシックスの基礎』H. T. エンゲルハート、H. ヨナス他著 東海大学出版会 1988年刊
- ・『バイオエシックスの基礎づけ』H. T. エンゲルハート著 朝日出版社 1989年刊
- ・『現代医療の道徳的ジレンマ』M. ロックウッド著 晃洋書房 1990年刊
- ・『環境の倫理』(上・下) S. フレチェット編 晃洋書房 1993年刊
- ・『環境思想を学ぶ人のために』加茂・谷本編 世界思想社 1994年刊
- ・『自然の権利』R. F. ナッシュ著 TBSブリタニカ 1993年刊
- ・『実践の倫理』P. シンガー著 昭和堂 1991年刊
- ・『環境倫理と環境教育』伊藤俊太郎編 朝倉書店 1996年刊
- ・『講座・文明と環境』梅原猛編 朝倉書店 1995年刊
- ・『心身関係論』池田善昭著 晃洋書房 1998年刊
- ・『社会哲学を学ぶ人のために』加茂直樹編 世界思想社 2001年刊
- ・『環境倫理学への招待』西川富雄著 こぶし書房 2002年刊



履修方法とユニットプログラム 履修モデル

1 科目一覧

哲学専攻 1 ～ 5 回生

	1 回生	2 回生	3 回生	4 回生
概 論	哲学概論 ・ (各 2) 倫理学概論 ・ (各 2)	哲学概論 ・ (各 2) 論理学概論 ・ (各 2)		
哲 学 史		哲学史 ～ (各 2) 倫理思想史 ・ (各 2) ヨーロッパ現代思想 ・ (各 2)		
講 読		* # 哲学・倫理学文献講読 (2)	* # 哲学・倫理学外書講読 (2)	
特殊講義 な ど		# 哲学特殊講義 ・ (各 2) # 現代哲学特殊講義 ・ (各 2) # 倫理学特殊講義 ・ (各 2) 応用倫理 ・ (各 2)	# 哲学特殊講義 ・ (各 2) # 現代哲学特殊講義 ・ (各 2) # 倫理学特殊講義 ・ (各 2)	
小 集 団	* 哲学研究入門(4) : 通年	* 哲学基礎講読(4) : 通年 * 倫理学基礎講読(4) : 通年	# 哲学講読演習(4) : 通年 # 倫理学講読演習(4) : 通年	# 哲学講読演習(4) : 通年 # 倫理学講読演習(4) : 通年 * 卒業論文(4) : 通年

注) 倫理学基礎講読は2005年から開講、倫理学講読演習 は2006年から開講、倫理学講読演習 は2007年から開講します。これらの科目は2004年度以降入学者が履修できます。

(昼間主コース)哲学専攻 6 ～ 8 回生、(夜間主コース)哲学・思想コース 6 ・ 7 回生

	1 回生	2 回生	3 回生	4 回生
概 論	哲学概論 ・ (各 2)	哲学概論 ・ (各 2) 倫理学概論 ・ (各 2) 論理学概論 ・ (各 2)		
哲 学 史		哲学史 ～ (各 2) 倫理思想史 ・ (各 2) ヨーロッパ現代思想 ・ (各 2) 【西洋哲学思想史 ～ (各 2)】		
講 読		* # 哲学・倫理学文献講読 (2) 【* # 哲学書講読 ～ (各 2)】	* # 哲学・倫理学外書講読 (2) 【* # 哲学英書講読 (2)】 【* # 哲学独書講読 (2)】 【* # 哲学仏書講読 (2)】	
特殊講義 な ど		# 現代哲学特殊講義 ・ (各 2) # 倫理学特殊講義 ・ (各 2) 応用倫理 ・ (各 2) # 哲学思想特殊講義 ～ (各 2)	# 哲学特殊講義 ～ (各 2) 【# 哲学特殊講義 ～ (各 2)】 # 現代哲学特殊講義 ・ (各 2) # 倫理学特殊講義 ・ (各 2)	
小 集 団 (昼)	* 哲学研究入門(4) : 通年	* 哲学基礎講読(4) : 通年	# 哲学講読演習(4) : 通年	# 哲学講読演習(4) : 通年 * 卒業論文(4) : 通年
小 集 団 (夜)	【* 研究入門 哲学・思想(4)】 : 通年	【* 基礎講読 哲学・思想(4)】 : 通年	【* 演習 (哲学・思想(4))】 : 通年	* 演習 (哲学・思想(6)) : 通年

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. * のついた科目は、哲学専攻の学生のみが受講できます。
3. # のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。
5. 【 】 のついた科目は、開講していません。

2 履修方法

【1～5回生カリキュラム】

必修科目（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

哲学・倫理学文献講読（2回生以上） 哲学・倫理学外書講読（3回生以上）	4科目 8単位選択必修
哲学講読演習（4回生以上） 倫理学講読演習（4回生以上） ゼミナール（テーマリサーチ）（4回生以上）	1科目 4単位選択必修
卒業論文（4回生以上）	1科目 4単位必修

登録必修科目（必ず登録・受講しなければならない科目）

哲学概論 ～ （ ・ は1回生以上 ・ は2回生以上） 倫理学概論 ・ （1回生以上）	2科目 4単位選択
哲学史 ～ （2回生以上） 倫理思想史 ・ （2回生以上） ヨーロッパ現代思想 ・ （2回生以上）	2科目 4単位選択
哲学研究入門（1回生のみ）	1科目 4単位
哲学基礎講読（2回生のみ） 倫理学基礎講読（2回生のみ）	1科目 4単位
哲学講読演習（3回生のみ） 倫理学講読演習（3回生のみ） ゼミナール（テーマリサーチ）（3回生のみ）	1科目 4単位選択

専攻科目以外の登録必修科目

- ・リテラシー入門（教養科目：4単位） 1回生通年
- ・外国文化講読（第1外国語）（人文科学総合講座：4単位） 3回生通年

1～5回生の社会人学生の皆さんは、 以外の必修科目、および登録必修科目はありません。
ただし、条件の許す限り、上記の必修・登録必修科目は履修してください。

【昼間主コース6回生以上カリキュラム】

必修科目（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

哲学・倫理学外書講読 哲学英書講読 哲学独書講読 哲学仏書講読	4科目 8単位選択必修
哲学講読演習	1科目 4単位必修
卒業論文	1科目 4単位必修

登録必修科目（必ず登録・受講しなければならない科目）

哲学概論 ～	2科目 4単位選択
哲学史 ～	2科目 4単位選択
哲学研究入門	1科目 4単位
哲学基礎講読	1科目 4単位
哲学講読演習	1科目 4単位

【夜間主コース6・7回生カリキュラム】

必修科目（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

なし

登録必修科目（必ず登録・受講しなければならない科目）

	研究入門（哲学）	4単位
	基礎講読（哲学）	4単位
	演習（哲学）	4単位
	演習（哲学）	6単位

フレックス学生の皆さんの卒業のためのカリキュラムは上記のとおりですが、昼間主コースの必修・登録必修を参照して履修を進めてください。

3 受講登録上の注意

1 回 生

1. 下記の科目は、クラス指定を行っています。クラスは掲示板にて発表します。指定されたクラスを本登録してください。

哲学研究入門、外国語科目（第1・第2）、リテラシー入門

2. その他、1回生配当の登録必修科目を忘れずに登録してください。

2 回 生

1. 下記の科目は、クラス指定を行っています。指定されたクラスを本登録してください。

初修外国語・応用 第1外国語として初修外国語を選択したみなさんが履修します。クラスは掲示にて発表します。

英語 ・ 第1外国語として英語を選択したみなさんが履修します。1回生終了時に希望調査が行われ、4月までにクラスが発表されます。

2. 下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録を行ってください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスを本登録してください。

哲学・倫理学文献講読

哲学基礎講読／倫理学基礎講読 希望に基づき、オリエンテーション期間に行われる総括的導入講義でクラス決定します。

3 回 生

下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録を行ってください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスを本登録してください。

哲学講読演習、ゼミナール（テーマリサーチ）*

すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを登録してください。

外国文化講読（第1外国語と同じ語種）

哲学・倫理学文献講読

哲学・倫理学外書講読

4・5回生、昼6～8回生

1. 下記の必修科目は、**本年度の登録で卒業の見込みができる方のみが受講できます**。決定したクラスを本登録してください。

哲学講読演習、ゼミナール（テーマリサーチ）*

すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを登録してください。

卒業論文 卒論ゼミと同一クラスを登録してください。

2. 下記の科目は、本年度の登録で資格取得の見込みができる方のみが受講できます。必ず受講登録してください。
- （教）教育実習** 総合演習と同一のクラスを登録してください。7回生以上は、文学部事務室へ個別相談に来てください。
- （芸）博物館実習**

* テーマリサーチ型ゼミナールは2001年度以降入学者のみが受講できます。

夜6・7回生

1. 下記の登録必修科目は、必ず登録してください。
- **演習（哲学・思想）** ただしフレックス学生は、**昼6～8回生の1.**に準じてください。なお、「演習」の単位が修得できなかったみなさんは、再度「演習」を登録しなおしてください。
2. 下記の科目は、本年度の登録で資格取得の見込みができる方のみが受講できます。必ず受講登録してください。
- （教）教育実習** 総合演習と同一のクラスを登録してください。7回生以上は、文学部事務室へ個別相談に来てください。
- （芸）博物館実習（4回生のみ）**

4 ユニットプログラム

文学部では2004年度より、皆さんの学び方の指針として、ユニットプログラムという考え方を提示することとしました。ユニットプログラムとは、**皆さんの所属する専攻・プログラムの特色を活かした将来像を念頭においたうえでの学び方・大学生活の過ごし方の指針**です。具体的には、専攻・プログラム毎に以下のような3つのユニットを提示します。

総合教養形成型ユニット

所属する専攻・プログラムの教学を中心としつつも、文学部の幅広い学問分野を広く修め、それを活かしてどのような将来像を描けるか、を提示します。

専門職養成型ユニット

所属する専攻・プログラムの特色を活かした専門的力量や技能などを形成し、それを活かしてどのような将来像を描けるか、を提示します。

研究職養成型ユニット

所属する専攻・プログラムの教学を深く修め、将来、（大学教員などの）研究職を目指す方策を提示します。

また、文学部には10専攻3プログラムがありますので、専攻・プログラムの特性に応じた内容となっています。

そして、これはよく覚えておいて頂きたいのですが、**必ずしもこのユニットの想定する将来像だけが全てではない**、ということです。極端な話をすれば、文学部を卒業して、ロースクールに入って、弁護士になる事だってありえる選択肢なのです（実際、司法試験に合格した文学部卒業生は過去にいますし、2004年度より設置されたロースクールは、法学部卒業生以外も広く門戸を広げています）。皆さんの意欲次第では、どのような道も開けるでしょう。では、なぜこのようなユニットプログラムを提示するかという趣旨は、皆さんが皆さん自身の将来像をよく考えて、それに向かって有意義な（学問やそれ以外も含めた）学生生活が送れるようにしていただきたいからなのです。目指す将来像が明らかになれば、それに向けた学生生活も充実することでしょう。

もちろん大学生活を送っていく中で目指したい将来像が変わることはありえますし、それは全く問題ありません。

したがって、ユニットプログラムは一つを選択するとか一つのユニットに所属するといったものではありません。今まで申し上げましたように、ここに提示するユニットはあくまでも例示です。これらを参考にして、皆さんが将来を考える一助になるようお願いしております。

なお、「ユニットプログラム」は、本専攻を通じて身につく素養や経験を踏まえた卒業後などの想定されるキャリア形成とのための学生生活の指針であり、「履修モデル」は、卒業論文で取り扱う研究テーマをタイプ別に分類し、その分野で推奨する履修科目を挙げたものです。それぞれの目的は異なっており、混同しないように留意してください。

哲学専攻（倫理学・応用倫理学コース、哲学・現代思想コース）各ユニットそれぞれの、学生の将来像とそれへ向けての学び方とを例示してみたい。

総合教養形成型ユニット

哲学専攻の学生がセールスポイントとして使える能力は、(1)常識や先入観にとらわれることなく、それらを徹底的に疑い、全くちがった角度から柔軟にものを考えることができるという批判的・創造的な思考能力（あるいはユニークさ）、(2)物事について「なぜ？」と根拠を問い、その根拠に対してさらなる根拠を問うというように問いを進め、根底から物事を考えるという思考態度、(3)場当たりの直観によって判断を下すのではなく、じっくりと考えたうえで判断を下すという姿勢、(4)論理的な思考能力、(5)個別科学的に縮減された人間理解ではなく、総合的な人間理解、といったところであろう。これらの思考能力や姿勢の必要性の指摘は、研究入門をはじめとする小集団科目、さらにはその他の専攻専門科目においておこなわれる。しかし、じっさいに(1)や(5)のような能力や理解を身につけるためには、総合教養的な科目の履修が必要となる。教養科目についてできるだけ多くの分野から科目を選択するのはもとより、専門科目についても自専攻の専門科目に偏ることなく、積極的に他専攻の専門科目も履修することが望ましい。文学関係の科目から総合的な人間理解を学ぶとか、史学関係の科目から批判的な思考の実践を学ぶとか、学際プログラムや地理学関係の科目から文化の多様性を学ぶなどが考えられる。卒業論文に関しては、テーマリサーチ型ゼミナールも有力な選択肢の1つとなる。

専門職養成型ユニット

哲学専攻では、専攻固有の専門職資格をとるユニットは設定されないが、将来の職業に役立つ能力の形成へ向けてのモデルを示してみよう。

哲学専攻卒業後の専門職として想定されるのは、教員（中学社会・高校公民）である。高度な教育能力を持つ教育者となるためには、単に必要な最低数の課程科目を履修するにとどまるのではなく、イノベーション・プログラムの学校教育臨床研修プログラムの科目、教育人間学専攻の専門科目、さらには学校図書館司書教諭課程の履修、課外では教育委員会との協定にもとづく学校ボランティアへの参加などを積極的に行うべきである。また近年、教職を学部卒だけでなく、大学院修了で得る「専修免許」も重要となってきたので、大学院進学も考えてもよい。

次に想定されるのは、看護・福祉方面の職業である。哲学・倫理学を学ぶことで、生死観に関する思想、生命倫理、ケアの倫理、看護の現象学などの知識を得、それを基盤にした実践を行うことのできる人材は現場でも求められている。もちろんこれらの職業に就くための国家試験等の資格取得の準備は専攻教学内では行えないが、大学で学んだ知識を社会の実践の場で活用するための一つの方向として考えてみることもできる。これらの学生は、上記のような思想や倫理を学ぶ哲学専攻専門科目のみならず、教育人間学専攻や心理学専攻の専門科目を積極的に履修することが望ましい。これらの分野を公務員として実践するなら、エクステンションセンターの公務員講座の受講を、また、専門家として現場で実践するなら応用人間科学研究科などへの進学も視野に入れるべきである。

さらに法科大学院への進学を想定することができる。法科大学院では、正確な論理的推論能力、緻密で深い思考能力などが求められるため、論理学や哲学関係の科目を履修することが必須であろう。正確な論理的推論能力、緻密で深い思考能力、善悪正邪に関する鋭敏な問題意識の育成に役立つような科目（倫理学・応用倫理関係の科目に加えて「論理学概論」など）、人間や現代社会についての深い洞察を学ぶ科目（「現代哲学特殊講義」～「宗教学概論」）を学ぶことは、法曹界で活躍することを目指す人材にとって必要なことである。

いずれの道を選ぶにせよ、大学院進学も含め、哲学で学び、身に付ける知識や素養の土台に1つの分野の専門的な能力を養うことが必要である。そのためには1人で努力しても限界があるケースも出てくる。同じ志を持つ学生同士が集まって勉強会などを行うのも良いだろう。そういった場合、自主ゼミ（後述）の制度を利用すると教室の

貸与などの補助が受けられるので大いに利用したい。

研究職養成型ユニット

博士課程後期課程まで進学し、研究職につくことをめざす学生を想定する。そのためには、高い水準の卒業論文を書くこと、最低2つの外国語で原典テキストを読みこなす能力を備えることが必要である。哲学専攻では、通常、ドイツ語もしくはフランス語を履修しているはずなので、その外国語と英語の2つの外国語の力（特に読む力）を伸ばすべきである。大学院入試でも初修外国語は必須である。2回生から履修できる副専攻の外国語コミュニケーションコースは会話中心のカリキュラムだが、外国語力を伸ばすには有効である。

ドイツ語を履修する場合は、カント、シェリング、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガー、フッサールなどが卒業論文の対象となり、フランス語を履修する場合は、ベルクソン、メルロ＝ポンティ、フーコー、デリダ、レヴィナスなどがあげられるが、自らの選択が初修外国語と一致しないテーマを選ぶ場合は、そのテーマに合った外国語を独学等を通して修得することが望ましい。

哲学史・倫理思想史の両面において幅広い知見をもつことも必要である。そこで、倫理学・応用倫理コース、哲学・現代思想コースの科目を主たる専門として履修し、その他先端総合学術研究科への進学をめざす者は学術プログラムの科目を履修するべきである。

先端総合学術研究科とは、人文科学と社会科学の刷新と総合を倫理的な原点「核心としての倫理」から試み、自然科学の成果を受け止めて、「公共」「生命」「共生」「表象」の四つのテーマにそった新しい研究領域を切り開くことを目指した大学院である。諸君が哲学専攻で学ぶ領域も深く関係する大学院として、文学研究科と同様、哲学専攻の学生の進学対象となり得る。

講読科目は、日本語文献を扱う「文献講読」のみならず、「外書講読」を可能なかぎりたくさん受講し、さらに大学院と共同開講科目を受講することも勧めたい。また、余裕があればドイツもしくはフランスへの交換留学へも積極的にチャレンジしてもらいたい。

5 哲学専攻履修モデル

以下に示す履修モデルは、哲学専攻で想定される卒業論文を幾つかの分野に分類し、その分野の卒業論文作成のために有用と思われる一連の科目を示した例です。もちろん、この通りに履修しなければならないことはありません。みなさんの興味・関心に応じてその他の科目も履修してください。なお、以下の科目はその配当回生どおりにおいているわけではありません。

科目区分	哲 学 ・ 現 代 思 想 コ ー ス					
	モ デ ル 1		モ デ ル 2		モ デ ル 3	
	伝統的な哲学の分野で卒論を作成するケース		ドイツ系の現代哲学の分野で卒論を作成するケース		フランス系の現代哲学の分野で卒論を作成するケース	
	専 攻 科 目	その他科目	専 攻 科 目	その他科目	専 攻 科 目	その他科目
1 回 生	研究入門 哲学概論 ・	宗教学概論 ・ (人文) 言語学 ・ (人文) 芸術・芸術史(人文) 哲学と人間(教養) 論理と思考(教養) 人間性と倫理(教養)	研究入門 哲学概論 ・	宗教学概論 ・ (人文) ジェンダー論(教養) 哲学と人間(教養) 論理と思考(教養) 人間性と倫理(教養)	研究入門 哲学概論 ・	宗教学概論 ・ (人文) ジェンダー論(教養) 哲学と人間(教養) 論理と思考(教養) 人間性と倫理(教養)
2 回 生	哲学基礎講読 哲学概論 ・ 論理学概論 ・ 哲学・倫理学文献講読 哲学史 ・ 哲学特殊講義 ・	ラテン語 ・ (人文) ギリシア語 ・ (人文) キリスト教思想 ・ (人文) 西洋思想 ・ (人文) 中国哲学史 ・ (中文) ヨーロッパ文化史 ・ (学際) 社会思想史(学際)	哲学基礎講読 哲学概論 ・ 論理学概論 ・ 哲学・倫理学文献講読 哲学史 ・ 現代哲学特殊講義 ・ ヨーロッパ現代思想 ・	キリスト教思想 ・ (人文) 西洋思想 ・ (人文) 西洋史概説 ～ (西洋史) ヨーロッパ文化史 ・ (学際) 社会思想史(学際)	哲学基礎講読 哲学概論 ・ 論理学概論 ・ 哲学・倫理学文献講読 哲学史 ・ 現代哲学特殊講義 ・ ヨーロッパ現代思想 ・	キリスト教思想 ・ (人文) 西洋思想 ・ (人文) 西洋史概説 ～ (西洋史) ヨーロッパ文化史 ・ (学際) 社会思想史(学際)
3 回 生	哲学講読演習 (伝統的な哲学分野の) 哲学・倫理学外書講読 哲学特殊講義 ・	外国文化講読(人文) 現代美術論(学際)	哲学講読演習 (現代ドイツ哲学系の) 哲学・仏書講読 哲学特殊講義 ・	外国文化講読(独)人文)	哲学講読演習 (現代フランス哲学系の) 哲学・仏書講読 哲学特殊講義 ・	外国文化講読(仏)人文)
4 回 生	哲学講読演習 (伝統的な哲学分野の) 卒 論		哲学講読演習 (現代ドイツ哲学系の) 卒 論		哲学講読演習 (現代フランス哲学系の) 卒 論	

科目区分	倫 理 学 ・ 応 用 倫 理 学 コ ー ス			
	モ デ ル 4		モ デ ル 5	
	伝統的な倫理学の分野で卒論を作成するケース		応用倫理の分野で卒論を作成するケース	
	専 攻 科 目	その他科目	専 攻 科 目	その他科目
1 回 生	研究入門 倫理学概論 ・	社会学入門(教養) 現代社会と法(教養) 宗教概論学 ・ (人文) 哲学と人間(教養) 論理と思考(教養) 人間性と倫理(教養)	研究入門 倫理学概論 ・	現代環境論(教養) ジェンダー論(教養) 科学技術と倫理(教養) 生命科学与倫理(教養) 哲学と人間(教養) 論理と思考(教養) 人間性と倫理(教養)
2 回 生	倫理学基礎講読 哲学概論 ・ 哲学・倫理学文献講読 倫理思想史 ・ 倫理学特殊講義 ・ 応用倫理 ・	社会学概論 ・ (人文) 西洋思想 ・ (人文) 人間関係論(人文) 法哲学(人文) 近現代の諸相(学際) 人間と宗教(学際)	倫理学基礎講読 哲学・倫理学文献講読 倫理思想史 ・ 倫理学特殊講義 応用倫理 ・ ヨーロッパ現代思想 ・	人間関係論(人文) 人間学(心と身体)人文) 環境社会論(人文) アジアとテクノロジー(学際) 人間と環境(学際)
3 回 生	倫理学講読演習 (伝統的な倫理学分野の) 哲学・倫理学外書講読 倫理学特殊講義 ・	教育人間学特殊講義 ・ (人間形成)(教育人間) 社会思想史(学際)	倫理学講読演習 (応用倫理分野の) 哲学・倫理学外書講読 倫理学特殊講義 ・	教育人間学特殊講義 ・ (教育人間) ジェンダーと文化(学際)
4 回 生	倫理学講読演習 (伝統的な倫理学分野の) 卒 論		倫理学講読演習 (応用倫理分野の) 卒 論	



学修を進めるにあたって

1 文献資料室と共同研究室

文学部には、教員・学生・院生の研究・学修の場として共同研究室と人文系文献資料室が設けられています。文学部教学の大きな目標である専門的知識・技能の養成や、自主的・集团的な学修・研究の充実のために、この二つの場が大きな役割を果たしています。

人文系文献資料室

修学館地階にある文献資料室には、主に文学部の学問・研究に関する専門図書、学会や大学が発行する学術雑誌、各種の資料（歴史学関係の史料を含む）、辞典、図録などが集中的に保管されています。それぞれの専攻・コースやインスティテュートに関する専門図書や資料などは、それぞれの専攻が重点をおいてきた専門分野や収書の方針によって特色をもつものとなっていますが、その中でも特に線装本など貴重な図書や、『立命館文学』との交換で寄贈された学術雑誌など、二度と収書することが至難なものについては、別置されています。しかし大部分の図書は開架閲覧方式がとられていて、書庫に入って図書を検索し、閲覧することができます。文献資料室の書庫は下記のとおり、各専攻関係の図書は次のように配置されています。

書庫A 日本文学・日本史・中国文学・東洋史・製本和雑誌（大学・一般）

書庫B キング・サイズなどの大型資料類

書庫C 漢籍・埋蔵文化財・未製本カレント・明大本・和装本など 書庫Cの図書は閉架請求制です。

書庫D 哲学・心理学・英米文学

書庫E 西洋史・地理学・文化人類学・インスティテュート・地方史・中国雑誌・洋雑誌

研究内容が部分的に重なり、隣接分野となっている専攻間の図書・資料を相互に利用しやすいよう同一書庫に配置しています。それによって広い基礎をもち水準の高い学修研究の発展と、新しい研究課題の発見をが期待できるでしょう。

人文系文献資料室の図書は、全体として専門性の高いものが多く、したがって低回生にとって直接利用できる図書は少なく、広い教養を身につけるための啓蒙書、文学作品、一般の雑誌などについては、中央図書館の利用が望まれます。しかし上回生のレポート作成や卒業論文、修士論文の作成にあたっては、人文系文献資料室に収められた図書の利用が必要となる場合があります。所定の申し込みをすれば、開架閲覧を許していない貴重図書・学術雑誌の閲覧も可能です。

専攻・インスティテュート共同研究室

専攻院生・学生が教員とともに、専攻の学問研究について自主的な共同研究をおこなう場として10専攻およびインスティテュートそれぞれに共同研究室が設けられています。それぞれ違いがありますが、専攻・インスティテュートの教学にとって基本的な辞典などの図書、また演習・講読などのテーマと直接かわりのある専門図書などが置かれています。実験実習的な研究教育が重視されている心理学・地理学・日本史学専攻の考古学コースでは、機器・用具類も充実しており、専用の実験・実習室施設もあります。

これら共同研究室は、大学の休業日（土曜日・日曜日・祝日・夏期の一斉休業日、年末年始など）および授業や卒業論文・修士論文の試問審査など、文学部の教務・事務にかかわって使用制限する場合を除いて、原則として毎日午前9時から午後9時30分まで利用できます。ただし、実際の時間は、専攻によって異なりますので、各専攻の規定に従ってください。共同研究室の運営や利用の仕方および、日常的な運営については、教員・学生・院生の三者で協議することにしており、相互に円滑で節度のある使用を心がけねばなりません。

2 クラスロッカーの使用法について

（1）クラスロッカーについて

クラスロッカーは、研究入門、基礎講読、講読演習、演習などのクラス単位に必要なものを、一時的に保管しておくものです。例えば、研究入門の講義時に欠席者用レジュメなどを保管したりするために利用するものです。したがって、個人用の荷物を保管するようなことは禁止をしています。また、基本的に、カギをしめないで使用していただきますので、紛失しては困るものなどは収納しないようにしてください。

(2) 使用の手順

1. 文学部事務室へ、クラス単位であらかじめ利用の申請し、使用するロッカーの場所を決めます。

申請は随時受け付けますので、必要がある場合は、文学部事務室で手続きして下さい。

オリエンテーション期間の「オリター懇談会」で選出する「クラス代表者」が、クラスを代表して手続きをするようにしてください。

2. 使用できる期間内は、必ず指定のロッカーを使用し、クラス単位で管理してください。

3. 使用期限が来れば、クラス単位で荷物の撤収を行ってください。

(3) 注意事項

利用上以下の点に注意して下さい。

クラスロッカーは、事前の申請に基づいてクラス番号を付番し、クラス指定しますので、確認して下さい。

クラスロッカーは1クラス1ロッカーではありません。

ロッカーは整理整頓に心がけて下さい。複数クラスで利用をお願いした場合、必ず物品のクラス間違いがないようにして下さい。

物置ではありませんから、ロッカーに保管するのにふさわしくないものは入れないで下さい。また、施錠しませんので、貴重品など紛失しては困るものは入れないで下さい。

万一紛失・盗難にあった場合、大学は責任を負いませんので注意してください。

サークルなどの団体が無断で使用した場合は、速やかに撤去します。

クラスロッカーの利用期限は、翌年3月15日（休日の場合はその前日）までです。ロッカーにはいつている物はすべて各クラスの責任で移動して下さい。翌年3月16日以降は、文学部事務室の責任で物品の廃棄をおこないます。

3 セミナーハウスの正課利用の手引き

(1) セミナーハウスについて

立命館大学では、正課・課外活動などで活用して、多様な学生生活を通じて得られる「学びと成長」を支援する施設として、セミナーハウスがあります。ここでは簡単に紹介します。ぜひ各クラスで積極的に利用してください。

なお、今年の4月から6月にかけて、新入生のクラスとして合宿をする場合は、別途の手続きになりますので、(5)の説明を参照してください。

1. 衣笠セミナーハウス（立命館大学より徒歩5分）

衣笠キャンパスに隣接したアカデメイア立命21の中にあり、洋室の会議室と宿泊室および和室の会議室兼宿泊室を擁し、宿泊できる人数は最大で150名の収容力を持つ施設です。

国際平和ミュージアムも併設していますので、見学を兼ねてご利用ください。（併設施設は学生証提示で無料）

2. エポック立命21（びわこ・くさつキャンパス内）

BKCにもセミナーハウスがあります。

(2) 施設の利用料金

正課で利用する場合は、宿泊料は無料となります。なお、正課以外でも担当教員の承認印を得ればクラス単位で利用する時は小集団クラス援助金で利用できます。

(3) 施設の予約方法

利用にあたってはまず利用したいセミナーハウスに電話にて予約をしてください。利用日の3カ月前から1週間前（なるべく2週間前）までに、直接電話で利用期間・人数等を申請し、予約をしてください。（退館時に次回予約日の予約もできます）予約後の手続き等は、衣笠学生センター（研心館2階）に必要な書類がありますので、ご確認ください。

衣笠セミナーハウス：075-465-8110 エポック立命21：077-561-2700

(4) その他

正課以外で利用する場合は、宿泊料が必要です。詳しくは衣笠学生センターにてご相談ください。

(5) 新入生クラス合宿の手続きについて

4月から6月にかけては、クラス、ゼミが集中的に利用する可能性があるため、あらかじめ、学部枠が設けられています。新入生クラスが、クラス合宿を行いたい場合は、この「学部枠」内で優先的に予約することになります。この期間にクラス合宿を行いたいクラスの代表者は、文学部事務室学生係にご相談ください。

4 学生印刷室の利用について

(1) 利用方法の説明

各小集団クラスでは、正課授業時に利用するレジュメ印刷の際に、学生印刷室に設置されている輪転機を利用することができます。輪転機は原稿1枚につき、10部以上の印刷をするときに利用できます。なお、原稿を作成する際にはB4もしくはA4にしてください。

文学部事務室前にある「小集団クラス印刷申請書」に必要事項を記載し文学部事務室窓口申請して下さい。
(事前に小集団クラス担当者許可印が必要です。)

記入された「小集団クラス印刷申請書」と「学生証」を窓口提出して下さい。窓口設置されている受付台帳に記載した後、学生証と引き換えに「印刷機の鍵」をお渡しします。

輪転機は、清心館1階 学生談話室東北角の学生印刷室内にあります。

印刷用紙は、文学部事務室内東側にあります。申請した枚数をもって、印刷をして下さい。(印刷に失敗する場合があるので、若干余分に持って行ってください。学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。)

輪転機の利用方法は、学生印刷室内の掲示を確認してください。

輪転機の使用が終了したら、速やかに「鍵」を事務室窓口まで返却して下さい。引き換えに学生証を返却します。(未使用の印刷用紙は、事務室内東側の位置に戻してください。)

(2) 「学生印刷室」の利用時間帯

1. 印刷は以下の時間帯で使用するようにして下さい。終了時間には必ず印刷が終了するようにして下さい。

授業日の 9:00~21:30

窓口時間等は変更する場合がありますので、掲示等注意して下さい。

(3) 利用にあたっての諸注意

鍵は他人に貸し出さないで下さい。また、他人の学生証でカギを貸すことはできません。

「学生印刷室」は印刷物を散らかさないよう、整理整頓に心がけてください。

輪転機が故障したら、機械を無理に操作せずに、事務室まで連絡してください。

不正使用は絶対に行わないで下さい。もし不正利用が判明した場合、所属クラスの輪転機利用禁止、利用代請求などを行います。

学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。不正に利用したことが発見された場合は、賠償していただきます。

5 自主ゼミ援助制度について

(1) 自主ゼミ制度について

授業で学んだことをさらに発展させ、その研究成果をまとめていくため、学部内のメンバーで組織された学習グループ（自主ゼミ）に対して、施設貸与や資料作成の費用を援助する制度です。

(2) 参加資格

文学部生・文学研究科生の登録が可能です。他学部・聴講生・科目等履修生・卒業生は登録できません。

(3) 援助内容

1. 経済援助 生協で利用できるコピーカード 1,000円分
2. 施設貸与援助 学習会・研究会のための施設貸与および自治会輪転機使用（用紙は各自で準備）
3. 自主ゼミ用掲示板の使用 清心館 1Fにある自主ゼミ用掲示板を使用することができます。

(4) 受付期間・受付方法

登録の受付は、年2回、4月と10月に文学部事務室または文学部自治会（清心館 1F）にて行います。
登録手続きの詳細については、別途掲示にてお知らせします。（4月上旬および9月中旬に掲示予定です）

(5) その他

自主ゼミ活動についてはセメスター単位で登録を受け付けます。また、活動終了時に、活動実績・成果を報告してもらいます。

6 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて

(1) 「小集団教育推進補助費」の目的とその適用の範囲について

各小集団クラスにおける学生の自発的・集団的学習、研究活動を行うために必要な以下の目的について補助を行います。「小集団教育補助費」では下記の例のような使用が可能です。その執行については、各小集団において会計担当者を決めて文学部事務室に届け出て下さい。会計担当者には「クラス資料費伝票」を交付しますので、会計担当者が責任をもって管理・執行するようにしてください。

生協発行のコピーカード（1回の購入限度額5,000円、1クラス15,000円まで）

クラス共通のフロッピーディスク（1クラス2,500円まで）

クラス教材用VTRテープ（1クラス2,500円まで）

その他会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」等を参照してください。

(2) 補助額

1クラスにつき年額15,000円です。

(3) 適用期間

毎年4月伝票交付日～翌年2月末まで利用できます。

(4) 使用の流れについて

各クラスで、クラス代表者とともに、「クラス会計」担当者2名を選出してください。

（1回生は、オリエンテーション期間の「オリター懇談会」において選出してください。）

クラス責任者は、事務室が主催する説明会に参加してください。

（説明は、文学部自治会が招集するクラス代表者会議（仮称）を通じて行います。連絡があった場合には、必ず参加するようにしてください。なお、その際には、印鑑を持参の上参加してください。）

「伝票」を交付します。

本学生協（中川会館地下1階）にて物品等の購入ができます。使用方法是、会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」および「伝票」の裏書を参照してください。1クラス年間15,000円まで使用できます。使用期間は「伝票」交付日から翌年2月末までになります。伝票をなくした場合は、事務室に申し出てください。

「伝票」を返還します。

使用期限（翌年2月末日）を満了した場合は3月15日（休日の場合はその前日）までに、全額（15,000円）を使用した場合は、直ちに「伝票」を事務室に返還してください。

7 清心館「学生談話室」の利用について

清心館の一階に「学生談話室」があります。これは、学生の交流・休憩、クラス活動、自習等を行うための施設であり、文学部が「学生談話室利用申し合わせ」に基づいて文学部自治会と共同管理しつつ、日常的な運営を学生の自治に委ねています。利用者が相互に譲り合って、気持ちよく利用できるように努めてください。

1. 「学生談話室」は全面禁煙です。
2. 紙コップや空き缶などゴミは必ずゴミ箱へ捨てるようにしてください。
3. 椅子や机などを勝手に動かしたり、汚損したりしないようにしてください。
4. 「学生談話室」を利用して行事や情宣活動を行うことは許可制です。利用を希望する団体は、文学部自治会に相談の上、文学部事務室の許可を得てください。なお、許可された場合も「学生談話室利用申し合わせ」を遵守して利用するようにしてください。

8 立命館大学人文学会

立命館大学人文学会は、立命館大学文学部における学問研究の発展・深化と普及を目的として、文学部の教員・院生・学生によって構成された学会です。

当学会の活動は、1934（昭和9）年『立命館文學』の創刊に始まっています。この『立命館文學』は、斯界の評価も高く、月刊にて定期的に発刊されていましたが、戦争の拡大するなか、1940（昭和15）年10月には、ついに第60号の刊行をもって一時中断のやむなきにいたりました。しかし戦後間もない混乱期の1947（昭和22）年7月には、早くも『立命館文學』第61号の刊行を再開し、今日にいたっています。

1952（昭和27）年1月に、学会は立命館大学「人文学会」として正式に発足。会則を制定しました。1969（昭和44）年には、新たに学生部会が発足し、更に充実した学会に発展しました。

『立命館文學』の発行は、2005（平成17）年3月現在で、第589号に及んでいます。

人文学会の主要な活動は、『立命館文學』の刊行と教員・学生の研究・学修の助成におかれています。『立命館文學』に掲載された研究論文は、専任教員の論文をはじめ、学部学生の卒業論文のタイトルや院生の修士論文の概要、及び院生のおこなった書評や学界動向の紹介、さらには卒業生や非常勤講師の研究論文も数多く掲載されています。発表された研究論文の内容は、わが国の各分野の学界において高い評価をうけているものが多く、『立命館文學』の学会誌としての水準の高さを示しています。

『立命館文學』に掲載されている研究論文や、修士論文・卒業論文・博士論文（概要紹介）・書評・学会動向などは、教員の講義・演習に生かされ、また学生のグループ研究・個人研究の参考に供されていますが、今後ますますひろく活用されることを期待しています。

「人文学会」はまた院生・学生の自主的研究の助成をも目的としており、そのための事業として、学生部会による研究誌の発行、あるいは公開講演会の開催なども行なっています。学生諸君は人文学会委員を選出し、それを通じて学会運営に参加することとなっています。みなさんが学会活動に深い関心を持ち、積極的に参加されることをつよく望みます。

9 文学部事務室について

(1) 文学部事務室とは

文学部事務室は、文学部の学生のみなさんが必要な手続きをおこなったり、必要な提出物を提出する等、事務手続を行う窓口であるほか、試験や授業に関する連絡を行ったり、履修・進路・留学などの相談に応じる窓口でもあります。なお、電話での対応は、基本的に行っておりませんので、直接の来室、または、メールによる相談をお願いします。

学生印刷室にある輪転機を使用したいとき（学生証が必要です）

各専攻・プログラムの共同研究室を利用したいとき（学生証が必要です）

学割・証明書の発行（可能な限り、証明書自動発行機で購入してください。）

休学・復学・退学や追試験、受講登録、教育実習登録など、各種の手続き書類の配布・受付

その他

文学部事務室を通じて、立命館大学が提供するさまざまなプログラムやサービス、施設などを活用し、積極的・主体的な学修・学生生活をおくってください。

(2) 窓口時間

授業のない期間については、時期によって窓口時間が違いますので、よく確認してください。

【開講期間中の窓口時間】9：00～11：30 および 12：30～18：30

2005年度より窓口時間帯が18：30までとなります。ただし、夜を中心に学修する学生、社会人学生で上記時間内に来室する事が難しい場合は、18：30～21：30に来室してください。

なお、17：00以降は学芸員課程についての対応はできませんので注意してください。

(3) 文学部事務室ホームページ

【立命館大学文学部事務室ホームページ】 URL <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jimu/>

文学部事務室では、主な情報をホームページで提供していますので、ご覧になってください。

（提供情報の一例）定期試験時間割、休講情報、教職課程・学芸員課程・学部独自インターンシップなどの諸連絡、その他

また、文学部事務室では、メーリングリストによる各種案内や休講情報も、随時行っています。1回生オリエンテーションでの「書類交付ガイダンス」でみなさんに配布する「RAINBOW ID通知書」のIDを活用して、情報入手してください。